

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：33920

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10417

研究課題名（和文）「医学教育における学修支援の在り方についての探索的研究」

研究課題名（英文）An exploratory study on academic support in medical education

研究代表者

青木 瑠里（Aoki, Ruri）

愛知医科大学・愛知医科大学・客員研究員

研究者番号：30465520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：成績下位者に対する学修支援のための勉強会（Small Group Peer Teaching）の有効性について、成績と学修に対するモチベーションをアウトカムとして検討することを目的とした。各年度の学年ごとに学習意欲（MSLQ）や精神衛生の尺度（UPI）に一部有意差は見られるものの、全体を通して、学修支援前後において、明らかな有意差は見られなかった。学修支援対象学生での個別面談を行い、成績不振の原因を検討した結果、成績不振の原因は多様であることがわかり、効果的な学修支援勉強会の構築にはさらなる検討が必要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の医学部卒前教育の大きな問題の一つとして「留年生の増加」がある。留年予備軍と思われる成績下位者に対し、学修支援勉強会を導入してきた。週1回の学修支援勉強会に参加することで、自主的に学修する態度と能力を身につけることができた可能性が示唆された。今後も継続して学修支援体制のより良い構築に向けた改訂を行いつつ、現代の医学部生の学修スタイルに沿った学修支援体制の見直しを継続的に行うこと必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effectiveness of the academic support study on learning motivation for medical students. Although some significant differences were found in learning motivation (MSLQ) and a scale of mental health (UPI) for each grade in each year, there were no significant differences before and after the study support throughout the entire study. Individual interviews were conducted with students who were eligible for academic support, and the causes of poor performance were examined. The results showed that there are several reasons of poor academic performance, indicating that further study is needed to construct an effective academic support study.

研究分野：医学教育

キーワード：医学部卒前教育 学修支援勉強会 MSLQ UPI

### 1. 研究開始当初の背景

近年の日本の医学部卒前教育の大きな問題の一つとして「留年生の増加」がある。全国医学部長病院長会議報告書によると、全国医学部留年者総数は、2009年1787名で総数比3.7であったが、2013年には2132名・総数比4.0、2017年2397名・総数比4.2と増加の一途をたどっている(平成21年度・25年度・29年度 医学教育カリキュラムの現状 一般社団法人 全国医学部長病院長会議)。欧米においても医学部教育における学修支援に対する心理的・社会的・身体的なサポートの重要性は指摘されており(Sayer, 2002; Sreeramareddy, 2007; Dyrbye, 2010; Hope & Henderson, 2014)、オーストラリアとニュージーランドにおいては、医学生の全人的なサポートの仕方についてコンセンサス・ステートメントも出されている(Kemp, 2019)。一方、日本においては、入試の種類別の入学後の成績分析(中島, 2008)、問題学生の文献的検討(川上, 2015)、日本の医学生に特有の幾つかの問題点(苛烈な医学部受験をくぐり抜けるために「教えてもらう」「与えてもらう」学びからの脱却の困難(渡邊洋子他, 2018)、親や高校や予備校の進路指導による「医学部進学モチベーション不足」、クラブ活動やアルバイトに時間を費やす「生活時間の不適切な配分」などの逸話的な指摘はあるものの、現時点では系統的な検討は不十分であり、「日本の医学生の心理的・社会的・身体的なサポートのあり方についての系統的検討」が是非とも必要であると認識するに至った。

本学では、留年の可能性が高いと思われる成績下位の学生に2017年度から週1日70分の学修支援勉強会を開始してきた。英国からの報告では初年次の医学生でも、上級生とで行う「peer teaching」は有効である(Jackson & Evans, 2012)とされており、この成績下位者に対する学修支援のための勉強会(Small Group Peer Teaching, 以下SGPT)は愛知医科大学が単なる知識伝達に終わらない学習方法として独自に構築したものであり、教育における創造的な取り組みである。グループでの学修機会を提供するとともに、各学年で受講すべき講義に出席し、その講義内容の理解を深め、自学自習の習慣を身につけるための支援を行う。

学修支援勉強会開始当初(2017年度)の目標を下記に示す。

目標:

1. 自主的に学修する態度と能力を身につける。
2. ディスカッションを通じてコミュニケーション能力を高め、将来の医療現場での良好な医師患者関係を構築できる技術を獲得する。
3. 受講すべき講義内容を理解し、疑問点を抽出し議論することで、学修への意欲を増し、同週に行われている講義での学修にモチベーションを高める。

### 2. 研究の目的

成績不振の背景にある多様な要因を明らかにし、類別を試みるとともに、試行を開始した成績下位者に対する学修支援のための勉強会SGPT(Small Group Peer Teaching)の有効性について、成績と学修に対するモチベーションをアウトカムとして検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

2020年度～2023年度の学修支援参加者を対象とした。2020年度においては、コロナ禍のため、成績下位者に対しては、学修支援対象者であることの通知のみで、学修支援勉強会は開催

できなかった。本学における学修支援勉強会は、実施方法を改訂しており、その実施状況について図1に示す。

	従来型（2018-2019年度）	2021年度	2022年度以降
対象者	1～3年の成績下位10から20名	1～2年の成績下位10から20名	1～4年の成績下位10から20名
留年生	なし	対象	対象
参加意志の確認	なし	なし	あり
実施期間	前期 4月から7月 後期 10月から1月	前期 4月から7月 後期 9月から11月	前期 5月から7月 後期 9月から12月
回数（前期+後期）	約20回	約10回（コロナのため隔週）	約20回
実施日と時間	週に1回・70分	週に1回・70分	週に1回・70分
グループの分け方	医学教育センターで決定	医学教育センターで決定	参加者自身で自由に決定
学修支援の方法（1～2年）	1～2年は受講講義内容のまとめ・発表課題提出	1～2年は受講講義内容のまとめ・発表課題提出	1～2年は受講講義内容のまとめ・発表課題提出
学修支援の方法（3～4年）	3～4年は受講講義内容のまとめ・発表課題提出	3～4年は受講講義内容のまとめ・発表課題提出	3～4年はCBT問題や試験前の復習課題提出
教員チューター制度	なし	なし	あり
学生チューター制度	なし	なし	あり（2年生のみ）

図1. 学習支援勉強会の実施方法の推移

2020年度においては、コロナ禍のため、成績下位者に対しては、学修支援対象者であることの通知のみで、学修支援勉強会は開催できなかった。2021年度は分散登校による登校制限により、学修支援勉強会を制限して実施した。2022年度以降においては、従来の学修支援勉強会の実施方法を以下のように一部変更して行った。1)複数の教員（基礎系教員、臨床系教員）をチューターに加えた。2)グループ編成を学生自身で編成させ、学修支援勉強会の参加を学生に選択させた。

学修支援対象者に対して、学習意欲（Motivated Strategies for Learning Questionnaire: MSLQ）および精神的健康度（University Personality Inventory: UPI）のアンケートを用いて、学修支援前後におけるMSLQおよびUPIの変化を検討した。MSLQは、動機づけ尺度である「内的目標志向」「外的目標志向」「学習価値」「学習や成績に対する自己効力感」「テスト不安」「学習能力やスキルの保有」の6下位尺度から構成されている。さらに、UPIは、「精神身体的訴え」「抑うつ傾向」「対人不安（劣等感）」「強迫傾向」「被害関係念慮」の下位尺度に分けられる。

学修支援対象者すべてにおいて、学修支援前後でWebにて回答してもらい、学修支援前後で回答を得ている回答者を分析対象とした。

#### 4. 研究成果

本学においては、2017年度から留年予備軍と思われる成績下位者に対し、学修支援勉強会（Small Group Peer Teaching）を導入してきた。

2020年度においては、コロナ禍のため、成績下位者に対しては、学修支援対象者であることの通知のみで、学修支援勉強会は開催できなかった。2020年度によるアンケート実施の結果、MSLQの下位尺度である「内的目標志向」および「外的目標志向」が、2年生において、後学期開始時と比較し後学期終了後において低下しており、学習意欲の低下が見られた。また、UPIの下位尺度である「抑うつ傾向」が、後学期開始時に比べ、後学期終了時で上昇しており、抑うつ傾向が見られた。

2021年度においては、コロナ禍以前に行ってきた学修支援勉強会を一部制限した日程で実施した。MSLQの結果、1年生においては、後学期学習支援開始時と比較して後学期学習支援終了後において、MSLQの下位尺度である「内的目標志向」が有意に低下した。また、UPIに関しては、

学修支援対象者の学修支援開始時のUPI得点が高く、学修支援終了時のUPI値は個人差が大きかった。特に、学修支援開始時にはカットオフ値を超えていたが、終了時には減少している学生が数名存在した。

2022年度以降は、下記の学修支援の目標を掲げ、学修支援勉強会の方法を改訂した。

目標：

1. 自主的に学ぶ態度と能力の獲得をサポートするだけでなく、学生同士意見交換を通じて更なるコミュニケーション能力を高める。
2. 各学年の授業を担当している教員チューター、学生チューターの導入により、深い学びを導く。
3. 学修支援勉強会への参加は学生の自由意志とし、グループ編成も学生自身に委ねることで、学修者中心の学修環境にする。

2022年度においては、従来の学修支援勉強会の実施方法を以下のように一部変更して行った。1)複数の教員(基礎系教員、臨床系教員)をチューターに加えた。2)グループ編成を学生自身で編成させ、学修支援勉強会の参加を学生に選択させた。

2022年度学修支援対象者に対して、MSLQの結果、前学期においては、2年生において、「外的目標志向」、「学習や成績に対する自己効力感」、「学習能力やスキルの保有」が学修支援勉強会後において有意に上昇し、学習意欲の上昇がみられた。しかし、後学期においては、学修支援前後での有意差は見られなかった。UPIに関しては、1年生の前学期において、UPI値が学修支援後において有意に減少し、精神身体的訴え(自律神経症状)等の点数が減少した。

2023年度においては、2022年度の変更に加え、学生有志を学生チューターに加えた。MSLQおよびUPIによるアンケート結果では、学修支援後において、学習意欲や精神衛生の尺度に明らかな改善効果は見られなかった。2023年度においては、学修支援対象学生での個別面談を行い、成績不振の原因を検討した。その結果、学業不振の原因として、「勉強時間が単に不足している者」、「入学後の能動的、自主的な学びへの移行をスムーズに行うことのできない者」、「試験の時に過度な緊張のために成果が発揮できない者」、「医師になるモチベーションが低い者」など、成績不振の原因は多様であることがわかり、効果的な学修支援勉強会の構築にはさらなる検討が必要であることが示された。

学修支援対象者である学生からの学修支援勉強会に対する意見として、以下の意見が挙げられた。肯定的意見として、「毎週友達と復習する時間が取れた」、「友達と試験対策ができた」、「試験前のモチベーションのきっかけになった」、「日々の勉強のペースづくりになって勉強に意識が向いた」などが挙げられた。否定的意見として、「グループメンバーのやる気に左右されることがあった」との意見が挙げられた。授業を担当している教員チューター導入に関しては、「チューターから理解度を測る質問をしてもらえることが多く、質問しやすかった」、「学習面での相談にたくさんのもってもらい、モチベーションの向上につながった」、「試験前に分からないところを中心に質問でき、覚えるべきポイントを教えてもらった」などの肯定的意見が挙げられた。学生チューターの導入に関しては、学生チューター自身も学修支援学生に教えることで、自らの学修効果を実感していた。

さらに、これまでの学修支援に参加した学生の医師国家試験の合格率の分析結果をみると、一度学修支援勉強会に参加した後、ストレートで卒業に至る割合が年々増加傾向にあった。このことから、学修支援勉強会に参加し、週1回の勉強会に参加することで、自主的に学修する態度

と能力を身につけることができた可能性が示唆された。今後も継続して学修支援体制のより良い構築に向けた改訂を行いつつ、現代の医学部生の学修スタイルに沿った学修支援体制の見直しを継続的に行うこと必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤麻紀
2. 発表標題 コロナ禍における大学生の生活習慣および学修意欲
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青木瑠里
2. 発表標題 医学部留年を繰り返す学生に対する個人的学修支援の必要性
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木瑠里
2. 発表標題 愛知医科大学における学修支援対象者の学修意欲調査
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青木瑠里
2. 発表標題 愛知医科大学における学修支援対象者の学修意欲（第2報）
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤麻紀
2. 発表標題 コロナ禍での医学部学生の生活習慣および活動量の変化
3. 学会等名 日本医学教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伴 信太郎  (Ban Nobutarou)  (40218673)	愛知医科大学・医学部・特命教育教授   (33920)	
研究分担者	宮本 淳  (Miyamoto Jun)  (40340301)	愛知医科大学・医学部・准教授   (33920)	
研究分担者	佐藤 麻紀  (Sato Maki)  (60351102)	愛知医科大学・医学部・講師   (33920)	
研究分担者	鈴木 孝太  (Suzuki Kouta)  (90402081)	愛知医科大学・医学部・教授   (33920)	
研究分担者	早稲田 勝久  (Waseda Katsuhisa)  (80367797)	愛知医科大学・医学部・教授   (33920)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------